サービス連合
サービス・ツーリズム産業労働組合連合会

第78号　2025年1月1日　毎月1日発行

サービス・ツーリズム産業労働組合連合会
〒160-0002 東京都新宿区四谷坂町9-6 坂町Mビル2階
TEL 03-5919-3261　　発行人 石川聡一郎

2025年　年頭所感

サービス・ツーリズム産業労働組合連合会
会長　櫻田あすか

2025年の新春を迎え、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

2024年はサービス・ツーリズム産業においては、為替の影響もあり、訪日外国人旅行者の大幅な増加とともに、旅行消費額も大きく上昇するなど、旺盛な需要が見られました。また、多くの企業で人手不足の深刻さもあり、人への投資という観点で賃金の改善が大きく進み、春季生活闘争での賃金引き上げの水準はサービス連合結成以来の高水準となりました。一方で元旦の能登半島地震に始まり、多くの観光地においても自然災害に見舞われた年でもありました。また、ウクライナやガザでの紛争は解決されず、地政学的不安定性が増しており、平和であることの大切さを考えさせられました。

さて、コロナ禍を脱し、明るい兆しもある一方、様々な課題がある中で、サービス連合は魅力ある産業の実現に向けて、2025年もしっかりと歩みを進めてまいりたいと思います。

まずは2025春季生活闘争に向けてです。サービス・ツーリズム産業は今後の日本の基幹産業といわれる一方で、労働条件や労働環境は他の産業と比較して高い水準とはいえない現状となっています。働きの価値にふさわしい労働環境を整備し、産業とこの産業に働くものの社会的地位の向上を目指していきます。特に賃金については、いい商品、いいサービスにはそれだけの値が付くのであり、価格には労務費も当然含まれるということをしっかり認識し、賃金改善に取り組んでいきます。加えて、総実労働時間の短縮など、総合的に労働条件の改善に取り組み、働きたい・働き続けたいと思える、選ばれる産業を目指してまいります。

次に組織拡大についてです。労使関係、労使コミュニケーションのあり方が現在議論されています。健全な労使関係があってこそ、会社の成長があります。コロナ禍で多くの働く仲間が去っていきました。人手不足をはじめ、職場で多くの課題がある中で、会社、ひいては産業の発展のためにも、労働組合を通じて労使が協力していくことが必要であり、働く仲間の輪をさらに広げていくことが大変重要です。組織が大きくなることで、その組織がもたらす影響力も大きくなります。サービス・ツーリズム産業には、まだまだ集団的労使関係の傘を広げる余地があります。10万人組織へのプロセスのもと、組織拡大の取り組みを着実に進めてまいります。

3点目はハラスメント対策についてです。サービス・ツーリズム産業において、カスタマーハラスメントはその言葉ができる前から課題としてありました。セカンドハラスメントからメンタルヘルスの不調につながるケースも多くあります。ハラスメントは人権侵害であり、いかなるハラスメントもあってはならないものです。ハラスメントを起こさない、許さない社会的な風土をつくっていくことはもちろんですが、その環境整備は産業全体、社会全体で進めていく必要があります。会社の対応・相談の体制が整備され、安心して働くことができる環境をつくるとともに、関係各所へ働きかけをおこなってまいります。

最後にジェンダー平等推進についてです。2025年にサービス連合の男女平等参画計画を改定します。サービス・ツーリズム産業は女性の割合が高いにも関わらず、意思決定機関への女性の参画はまだまだ足りていません。女性の活躍がさけばれてずいぶん久しくなりますが、なかなか進まない現状を本気で変えていかなくてはなりません。会社では働きやすい環境を整えること、労働組合としても活動時間などを含む見直しをおこない、誰もが参画しやすい環境を整えることは急務です。意思決定機関の構成は、結論に大きく影響します。多様性と包摂性のある社会を目指す産業別労働組合として、まずは女性の参画をさらに進めることに努めてまいります。

2025年は「乙巳（きのとみ）」です。

「乙（きのと）」は、草木が曲がりくねりながらも成長し、新たな命が芽吹く様子を表しています。

「巳（み）」は、蛇を象徴し、脱皮を通じて新しい姿に生まれ変わることから、「再生」や「成長」を意味します。これらが重なる「乙巳」は、変化や挑戦、新しい可能性が広がる年とされています。

サービス・ツーリズム産業を代表する唯一の産業別労働組合として、変化や挑戦を恐れず、魅力ある産業の実現に向けて、労働環境の向上と産業の発展のために尽力してまいります。

本年が、皆様にとって実りある年となるよう心より祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。

ジェンダー平等の更なる推進にむけて業界団体と連携
～LADY JATA委員会との意見交換会を実施～

11月19日（火）サービス連合本部会議室においてJATA（日本旅行業協会）関東支部のLADY JATA委員会との意見交換会を実施しました。

当日は冒頭にLADY JATA委員会の山本委員長、サービス連合櫻田会長から挨拶がありました。続いてJATA関東支部とサービス連合ジェンダー平等推進局から各委員会での議論と主な課題について説明し、その後意見交換をおこないました。

意見交換の中では、はじめにサービス連合参加者から各組合の取り組み事例を紹介した後、「LADY JATA委員会」・「サービス連合」双方の取り組みへの質問と共に男性の育児休業取得の課題や女性の管理職登用の課題等について質問・意見が交わされ、活発な意見交換となりました。

サービス連合は産業全体の機運醸成にむけて、引き続き業界団体にも働きかけ、ジェンダー平等を推進していきます。

連合が2025春季生活闘争方針を決定
～みんなでつくろう！賃上げがあたりまえの社会～

連合は11月28日、第94回中央委員会を開催し、2025春季生活闘争方針を決定しました。

連合が2022春季生活闘争からスタートした「未来づくり春闘」は、2023春季生活闘争で〝転換点〟をつくり、2024春季生活闘争では〝ステージ転換〟に向けた大きな一歩を踏み出しています。2024年の闘争では33年ぶりの5％台の賃上げが実現したものの、生活が向上したと実感している人は少数にとどまり、個人消費は低迷しています。物価高が勤労者家計を圧迫してきたことや、中小企業や適切な価格転嫁・適正取引が進んでいない産業などで働く仲間にこの流れが十分に波及していないことも要因の一つであると捉えています。

「賃金も物価も上がらない」という社会的規範（ノルム）を変えるのはまさに今。連合は今期から「メインスローガン：みんなでつくろう！賃上げがあたりまえの社会」「サブスローガン：みんなでつくろう！働く仲間の労働組合」の2つのスローガンを掲げています。

2025春季生活闘争の取り組みに向け「①サプライチェーン全体で生み出した付加価値の適正分配、適切な価格転嫁・適正取引」「②賃金水準闘争を強化していくための取り組み」「③雇用の維持・創出、社会的セーフティネットの維持・強化」「④集団的労使関係の輪を広げる取り組み」の4点の基盤整備を行うことに加えて、人財への投資が重要であるという考えを堅持し「底上げ」「底支え」「格差是正」にむけた賃上げの取り組み内容について、満場一致の承認を得て、第94回中央委員会は閉会しました。

能登半島北部豪雨災害　連合救援ボランティアに参加
～被災地の心の景色を明るくするために～

2024年9月21日、台風14号からの温帯低気圧、活発な秋雨前線や線状降水帯などの影響で、石川県の能登半島北部を中心に記録的な豪雨が発生しました。お亡くなりになられました方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、負傷・被災されました方々に心よりお見舞い申し上げます。

連合は被災地復興支援活動として10月14日～10月31日まで12日間、のべ450名規模で災害ボランティアを派遣し、サービス連合は加盟組合の協力のもと、10月28日から4日間の復興支援活動に参加しました。

元旦の震災の傷が癒える間もなく被った豪雨災害によって、まちも被災者も、立ち直る気力を奪われ、被災地の景色は大きく変わってしまっています。その中で、私たちの活動はとても小さなものでしたが、現地で支援しているNPO団体のスタッフから、「まちの景色は簡単には変わらないかもしれないけれど、住民の心の景色は変わっていると思います」と復興支援の大切さを説いて頂きました。

サービス連合では、被災者の「心の景色」を明るくするためにも、引き続き能登半島復興への支援を続けていきます。

Rengoユースター・カレッジ受講報告
サービス連合　鴨志田夏希 中央執行委員

鴨志田夏希
中央執行委員

次世代リーダーを育成することを目的としたRengoユースター・カレッジに第3期生として受講してきました。「将来求められる次世代のリーダー像」を自ら考え、それぞれが有する課題感にもとづき必要と考える知識を身につけ、これらを活かして諸活動や連合運動の実践につなげることを目標としています。

連合の構成組織から、概ね35歳以下のユース世代の専従者を対象に募集があり、第3期ではサービス連合から4名が受講しました。

2023年12月に第1回をスタートし、全10回。2024年9月に修了式を終えています。

第1回の講義では行動特性検査をし、自身の強み・弱みを把握しました。強みを延ばし、弱みを改善するためにカレッジ内で身に着けたいことや、日常の中で意識をして取り組むことを共有し、毎カレッジで1カ月ごとの課題の振り返りもおこなってきました。産別は違えど、年齢や、専従歴が近しい受講生が多いため、カレッジ生で切磋琢磨しながら受講することができました。

単組だけではなかなか聞くことが出来ない講義を連合の方からうけることができたこと、他産別の方と1年をともにし仲間ができたこと。大変貴重な経験となりました。カリキュラムの中では野外講義もあり、第3期ではフードバンクかながわと、賀川豊彦記念館に行ってきました。

フードバンクかながわでは、ご家庭で使い切れない未使用食品を寄贈いただき、食の支援を必要とされている方、施設、子ども食堂等に提供しています。私たちは寄贈された食品の仕分け作業や、お米の袋詰めを体験させていただきました。多くの食品が寄贈されていましたが、お米が不足しており量を減らして提供しているなど、苦労も伺えました。フードバンクに取り組んでいる企業も多くあると思いますが、労働組合としてもこういった「助け合い」「支え合い」「分かち合い」の取り組みを身近に感じ、日々の活動に繋げることが必要であると感じました。

第3期のRengoユースター・カレッジは修了しましたが、今後の活動の中でも自身の活動に目標を持ち、意識をして取り組んでいきたいと思います。活動を進めるためには、自身を知ること、他を知ることが必要です。第4期Rengoユースター・カレッジ生の募集は締め切りましたが、これから単組・産別を担う皆さんにとって、このカレッジはとても貴重な経験になるはずです。単組活動もある中で、1年を通し受講することは大変かもしれませんが、第5期以降もRengoユースター・カレッジ生の輩出にご協力をいただきますようお願いいたします。

受講の様子　連合 清水事務局長より講演「次世代リーダーに期待すること」

第3期Rengoユースター・カレッジ修了式の様子

国際労働財団（ＪＩＬＡＦ）にて産業の現状と産別の活動について講演！

～インド・スリランカの労働組合役員と活発な意見交換～

11月28日、国際労働財団（ＪＩＬＡＦ）にて、鴨志田夏希中央執行委員が講演をおこないました。ＪＩＬＡＦは、開発途上国の自由にして民主的な労働運動の発展と社会・経済開発に貢献することをめざし、１９８９年に設立されました。今回は、インドならびにスリランカのナショナルセンターを始めとする労働組合の役員が来日し、日本の文化や労働運動の実状について学ぶプログラムの一環として、サービス・ツーリズム産業の実状やサービス連合の活動について講演依頼がありました。当日は鴨志田中央執行委員より、人流・物流をつうじた日本経済への貢献や、産別としての労働者の労働条件向上、産業地位の向上にむけた取り組みについて説明をおこないました。説明後の参加者との意見交換では、コロナ禍における産業への影響や、未組織労働者の組織化にむけた取り組み、具体的な手法等、多くの質問があり、活発な意見交換となりました。コロナ禍により組合員数が減少しているなかで、積極的に組織拡大に取り組むサービス連合の姿勢に、出席者から賞賛の声があがりました。

労働分野における国際協力や国際産別との連帯は、特に開発途上国の健全な労使関係構築と産業発展に貢献するだけでなく、世界の平和、安定に寄与するものです。平和産業であるサービス・ツーリズム産業にとって、労働界の国際連帯による親日的な労働指導者を輩出することは、平和外交の一翼を担っているともいえ、大変意義のある運動であり、サービス連合はこれからも国際連帯をすすめます。

サービス連合について講演する鴨志田中央執行委員（中央奥の右）

ＩＵＦ ＨＲＣＴ部会委員会に出席

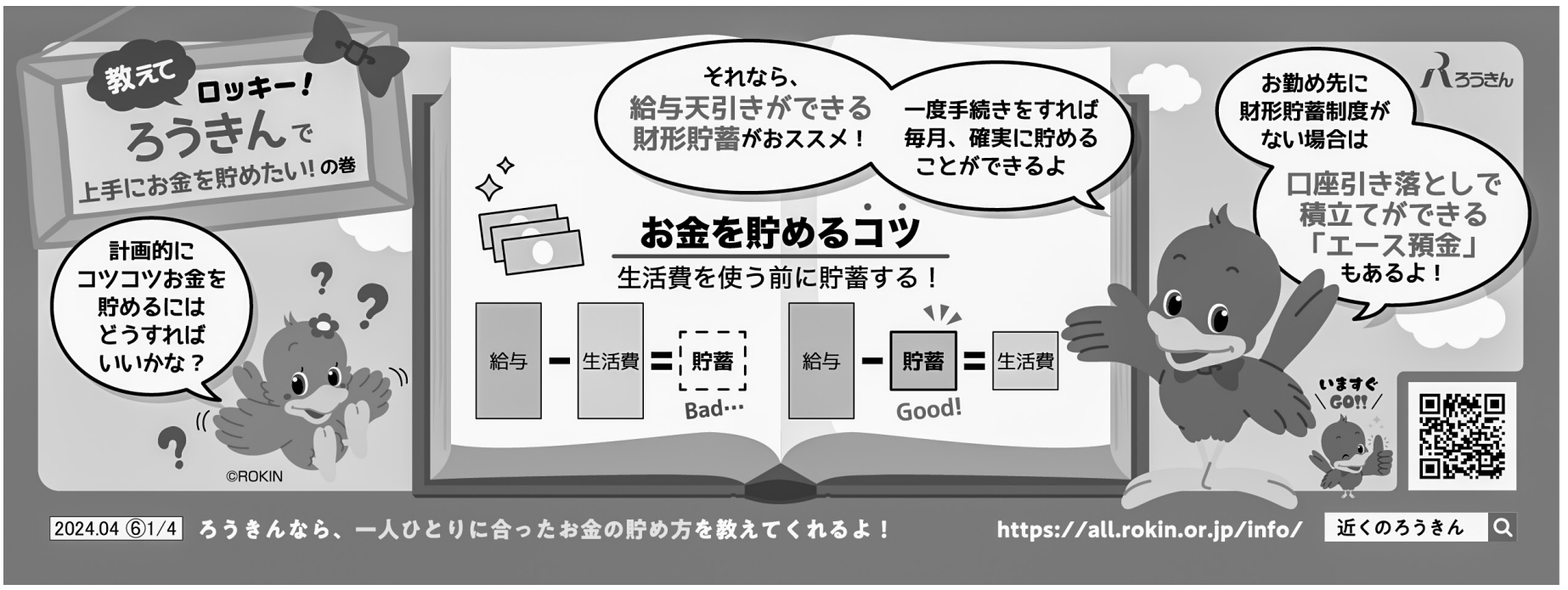
11月13日・14日、ＩＵＦ（国際食品関連産業労働組合連合会）の産業別部門会議の一つであるＨＲＣＴ（ホテル・レストラン・ケータリング・ツーリズム）部会委員会がアンティグア・バーブーダにおいて開催され、サービス連合から櫻田会長と齋藤会長代理が出席しました。

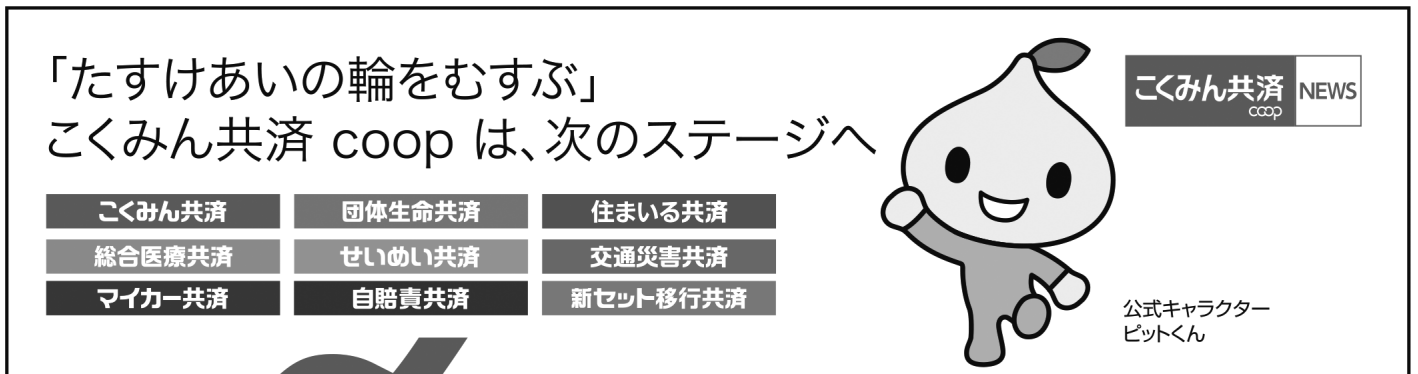
ＩＵＦは世界に８団体ある国際産業別組織（ＧＵＦ）のひとつで、ＨＲＣＴをはじめ食品に関連する産業の労働組合組織の国際的連合体です。本部はスイス、ジュネーブにあり、現在１３０カ国３９６あまりの組合組織から構成され、約２５５万人の会員を有しています。

ＩＵＦは、未組織労働者の組織化、発展途上地域を中心とした教育活動から、ＩＬＯ（国際労働機関）と協力しながら食品関連産業に関する国際労働基準（ＩＬＯ条約、勧告）の設定や普及、関連する国際機関への政策提言や意見具申など、幅広い活動をおこなっています。最近の活動対象テーマとしては、経済のグローバル化に伴う諸問題（多国籍企業問題、通商貿易を巡る問題等）や地域別諸問題（人権、民主権、労組権の確保・拡大等）が中心となっています。産業別部門会議は各産業個別の課題解決にむけて開催されています。

今回のＨＲＣＴ部会委員会では、気候危機と異常気象がツーリズム労働者に与える影響など、世界にまたがる産業の各種課題について各国の出席者から活発な意見が交わされ、実りある議論となりました。

発言する櫻田会長（右から2番目、右は齋藤会長代理）





國學院大学「雇用と働き方」講座にて、サービス・ツーリズム産業の魅力を講演！

12月5日、國學院大学の「雇用と働き方」の講座において「サービス・ツーリズム産業の仕事と働きがいについて」と題し、石川事務局長が講演をおこないました。この講座は年間をつうじ、様々なゲスト講師を招き、ワークルールなどの労働関係の法律や、労働界の実状について学び、学生自身のキャリアを考える機会としています。当日は産業全体の実状についてデータをもとに説明するとともに、宿泊・観光・国際航空貨物それぞれの仕事と魅力・やりがいについて、講演をおこないました。また産業別労働組合の役割やサービス連合の歴史、これまでの取り組みについて説明をおこないました。学生からは、インバウンドが復調するなかでの現場課題と解決にむけた産別の役割と取り組みや、今後の日本経済を牽引する産業として必要な事業のイノベーションなど、様々な質問がありました。学生との意見交換のなかでは、厚生労働省の「令和6年版労働経済の分析」のデータをもとに、新卒者を対象とした採用も重要であるが、この産業で働きつづけたいと思える労働条件の整備や、人財への投資の必要性について、説明しました。講演の最後には、これから就職活動をおこなう学生にむけて、ぜひ私たちサービス・ツーリズム産業に入って欲しいとのメッセージを伝えました。産業の持続的な発展にむけ、人財こそが財産である産業として、これからも産業の魅力と可能性を広く社会に発信していきます。

講演する石川事務局長

社会貢献活動「書き損じハガキキャンペーン」

サービス連合では、社会貢献活動のひとつとして、ユネスコの「書き損じハガキキャンペーン」に協力する取り組みを行っています。住所の書き間違いなどで使わなくなったハガキを回収し、ユネスコへ届けることで、国際平和と人類共通の福祉の実現を目指す国内外での草の根活動を支援します。例えば、85円の書き損じハガキは79円の寄付になり、17枚でカンボジアでは１人がひと月学校に通えます。

この活動の意義を理解浸透させ、さらなる展開を図るため、2025年１月17日の第24回中央委員会開催に際し、つぎの取り組みを行います。加盟組合の皆さんの積極的なご協力をよろしくお願いします。

１．中央委員会における取り組み

(1) 休憩時及び終了後、会場入口付近にブースを設け、ポスターを掲出し、「書き損じハガキ」を回収します。

(2) 中央委員会へ出席しない加盟組合については、各加盟組合で取りまとめのうえ、サービス連合本部に送付してください。

２．年間をつうじた取り組み

年賀状の季節以外にも書き損じハガキは発生することから、サービス連合本部では随時回収を行い、適宜日本ユネスコ協会連盟へ送付する。

［参考］2023年度は、年間で1,163枚を回収（参考：68人が1ヶ月学校に通うことができる）

加盟組合紹介

ホテル日航大分 オアシスタワー労働組合

ホテル日航大分 オアシスタワー労働組合は、大分県大分市に所在するホテル日航大分オアシスタワーで働く組合員21名で構成し、２０２４年10月に開催した第24回定期総会において８名（男性６名、女性２名）の新執行体制を確認して、活動をスタートしています。

ホテル日航大分 オアシスタワーは、21階の建物でランドマークタワーとして大分市随一の高さを誇り、コンサートホールや劇場、県立美術館が隣接しただいたお客様のホテル利用だけでなく、天皇陛下をはじめとした皇族や海外からの要人など多くの方にご利用いただいているホテルです。

コロナ禍では、従業員や売上げが激減し、レストランの休業日や休業時間を設けるなど、営業縮小を余儀なくされましたが、新型コロナウィルスが２０２３年５月に感染症法上の５類となり、２０２４年秋にはコロナ前と比較するとようやく８割程度まで需要が戻ってきました。コロナ禍以降、人員も少なく思ったように組合活動が出来ていませんでしたが、新たな役員体制となりましたので、賃金、一時金をはじめとした組合員の生活向上と職場環境の改善のために、しっかりと活動を推進していきます。これからもよろしくお願いします！

ヒルトンホテルズジャパン ワーカーズユニオン

1965年東京ヒルトン労働組合の結成当時の委員長による、労働組合結成の理由は『外国人支配への反発』とのことでした。国内初めての外資系ホテルという事もあり、上司からの理不尽な指導や要求、恫喝をはじめとするハラスメントも横行していたと聞いています。労働組合が結成され、労使対等の話し合いにより従業員を大事にする現在の環境が構築されたのだと確信しています。

ヒルトンユニオンは、オープンショップ制であり、労働組合に加入しない自由が認められています。働く上で不満もなく悩みもないので新卒者の労働組合加入率は年々低下しており、組合役員の労力のほとんどが、組合員オルグ活動（組合員になってもらう）に割かれています。幹部は逆オルグ（組合辞めたいを説得）にモチベーションをダウンさせられています。労働組合は企業に必要という信念のもと、役員皆頑張っています。組合員に寄り添い、身近な相談者として関係性を構築する事により、少しずつですが、労働組合に理解を示す若者が増えてきています。労働条件や賃金制度など、労働組合が存在する事により享受されている事項を上から説明してもすぐには理解してくれません。心から誠意をもって話をする事で、「労働組合の事はよくわからないが、先輩の言葉を信じて労働組合に加入します。」という言葉が役員のモチベーションアップにつながっています。その組合員の期待に応えるため、より良い環境を構築するためにヒルトンユニオンは活動し続けます。

名古屋分会バスツアー企画

編集後記

昨年末、自宅の大掃除で本棚を片付けていたところ、２０１１年12月に２代目中村吉右衛門さん主演で上演された舞台「元禄忠臣蔵」のパンフレットが出てきました。忠臣蔵というと暮れの風物詩として舞台やテレビでよく目にしていましたが、私も幼少期からお気に入りの演目です。当時、歌舞伎座が建替で国立劇場での公演でしたが、お小遣いをためて（もう社会人でしたが）公演チケットを購入したのを思い出します。演目「大石最後の一日」の幕切れで「これで初一念が届きました！」との吉右衛門さんの台詞を聞いたときは、大向こうからの「播磨屋」の掛け声も相まって、身体が痺れるような感動を覚えたことが懐かしいです。「初一念」主君の仇を討つために様々な苦難を乗り越え、浪士が一矢乱れず、討ち入りで無念を果たす姿は、何度観ても心を揺り動かされます。

さて新年を迎え、サービス連合は２０２５春季生活闘争にむけ、加盟組合と一体となった取り組みが始まります。この産業で働く者の労働条件の向上にむけて、私たちも「初一念」が届くように取り組まなくてはなりません。労働運動には、松の廊下や討ち入りといった派手な立ち回りはありませんが、労使関係では日頃からの緊張感ある関係のもと、真摯な協議の積み重ねが大切です。労働法規やそれに基づく権利といった伝家の宝刀はありながらも、その刀に手をかけても抜かないといった駆け引きが、交渉の妙といえるのかもしれません。

新年を迎え、新たな幕があけました。今年の春の舞台では大向こうからの「要求貫徹！」という掛け声が響きわたりますように。

皆さま、本年もどうぞよろしくお願いいたします。（S．I．）